

トルコギキョウを核とした花きの周年生産

相双農林事務所双葉農業普及所

花き

新たなふくしまの未来を拓く園芸振興双葉地方推進会議(管内各町村、JA福島さくら、JA全農福島、福島県(農業振興課、農業総合センター、相双農林事務所双葉農業普及所))

1 実証の背景・概要

(1) 背景

○現状

福島第一原子力発電所事故によって双葉地域は営農中止を余儀なくされたが、風評の影響が少ない花きの栽培が始まり、特に比較的単価の高いトルコギキョウの栽培が拡大している。

しかし、秋出荷作型での品質低下(夏季高温による短茎開花等)が課題となっている。

○改善方向

夏秋期におけるトルコギキョウの安定生産を実現させることで、双葉地域の花き産地としての基盤を強固にし、営農再開を加速させる。

(2) 実証の概要

○導入機材及び面積

機材:プレハブ冷蔵庫(1坪)、実証面積:秋出荷作型1a

○技術の概要

作型適応苗(本葉2対展開後から一定の温度・光条件で育苗し、発蓄節数を調節した苗)を導入することで、秋出荷作型における切り花品質の向上が期待される。

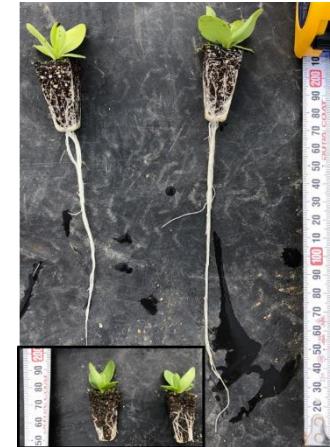


図1 トルコギキョウ作型適応苗
(左下:慣行苗)

2 実証の成果

(1) 成果

○作型適応苗は慣行苗と比べて切り花長、節数に優れ、上位出荷規格も多くなつた。

○切り花長が長かったことから直売所における単価設定を高くでき、売上が向上した。

(2) 課題

○直売所出荷は可能だが、市場出荷できる切り花品質は確保できていない。

(3) 产地への波及効果

○近年の高温で秋出荷作型を休止していた直売所出荷者が興味を示すなど技術の周知が図られてきている。

(4) 今後の対応

○導入する作型適応苗の品種数を増やし、直売所出荷における切り花品質向上効果を検証する。

表1 秋出荷作型の切り花品質

区	開花時期(月日)			切り花長(cm)	節数(節)	出荷規格割合(%)					単価(円/本)
	始期	盛期	終期			2L	L	M	S	外	
作型適応苗	9月6日	9月8日	9月11日	75.2	14.2	20	46	32	0	2	163.5
慣行苗	9月1日	9月5日	9月7日	63.2	12.1	0	6	44	46	4	134.0

※1区10株調査。

※切り花長、節数は平均値。

※開花時期は、が調査株の始期：10%、盛期：50%、終期：90%が開花(第二小花)した日。

※節数は抽苔節数。

※出荷規格割合は、2L：80cm以上、L：70cm以上80cm未満、M：60cm以上70cm未満、

S：50cm以上60cm未満、外：50cm未満(1区50株調査)。



図2 開花時の草丈(左:作型適応苗、右:慣行苗)

3 実証担当農家・产地より

○去年までの秋出荷作型では短茎開花で直売所出荷もできない切り花が多かつたが、作型適応苗は切り花長が長くなり、ほとんど直売所出荷できた。来年は品種数を増やし作型適応苗を導入したい(実証担当農家より)。

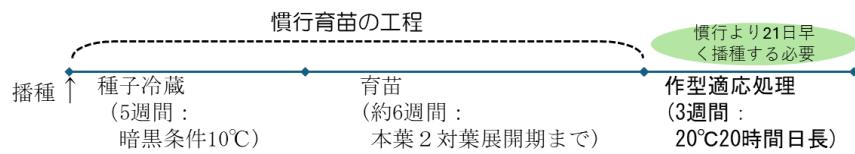
○作型適応苗を購入できるようになれば、直売所出荷向けに導入を検討したい。

トルコギキョウを核とした花きの周年生産（作型適応苗の効果）

(相双農林事務所双葉農業普及所 作物名：トルコギキョウ)

技術の概要

- ・慣行育苗された苗に一定の温度・光条件で追加の養成を行った苗。具体的には、200穴から288穴のセルトレイ苗について、本葉2対葉展開後から、20°C20時間日下で3週間管理することにより、定植後の節数を1～2節程度増加させ、草丈の伸長を促し、切り花長の増加を期待するもの。



想定する
普及対象

- ・品目及び作型：トルコギキョウ抑制作型（出荷時期：9月～10月頃）
- ・生産者：高温による短茎開花を改善したい生産者

技術導入のメリット

- ・従来の抑制作型は短茎開花により出荷率が低いが、作型適応苗の導入により切り花長を確保できる。

技術導入により期待される効果

- ・切り花長の向上が図られ、出荷本数の増加による販売額の増加が期待される。

技術導入のデメリット

- ・切り花長を伸ばす以外の効果は期待できない。
- ・品種により効果の大小がある。
- ・生産者による処理では、電照可能な冷蔵庫が必要。

主な導入コスト

資材名	数量	耐用年数	金額（円）
プレハブ冷蔵庫 ※1	1	7	935,000
電照施設 ※2	1	7	733,760
合計			1,668,760

※1：苗供給可能面積は8.1a

※2：苗供給可能面積は2.7a

技術導入比較

項目	技術導入前又は慣行	技術導入後
切り花長(cm)	63.2	75.2
出荷率(%)	96	98
出荷単価(円/本)	134	164
売上(千円/10a)	2,573	3,214
農業所得 (千円/10a)	428	545



図1 開花時の状況（左：作型適応苗、右：慣行苗）

技術導入の注意点等

- ・作型適応苗による切り花長増加の効果は品種間差があるため、試験的な導入により効果を確認した上で、本格的な導入に移ること。
- ・この技術は、枝数（花数）の増加に寄与しない。
- ・上記の技術導入比較は、直売所出荷者の実績による。

実証農家の反応

（R6年度）去年までの秋出荷作型では短茎開花で直売所出荷もできない切り花が多くなったが、作型適応苗は切り花長が長くなり、ほとんど直売所出荷できた。来年は品種を増やして作型適応苗を導入したい。